2025年(令和7年)9月30日

ほっかいどうNIE通信

Newspaper in Education

第108号

発行　北海道NIE推進協議会　〒060-8711　札幌市中央区大通東4丁目1　北海道新聞社内　☎011-210-5802　FAX011-210-5826

北海道新聞NIEホームページ(https://nie.hokkaido-np.co.jp/)でバックナンバーを閲覧できます

「NIEの再定義必要」

道セミナー　尾高さんが強調

偽情報への弱さも指摘

教育・報道関係者らを前に「民主主義の担い手を育てるには新聞で学ぶことの大切を伝えていくことが大事」と呼びかけた尾高泉さん

北海道NIE推進協議会（菊池安吉会長）は「メディアリテラシーの育成とNIEの役割」をテーマとする第9回NIE北海道セミナーを8月8日、札幌市中央区の北海道新聞社で開いた。前日本新聞博物館館長の尾高泉さんが「NIEの再定義」と題して講演。八雲町立野田生中の川端裕介教頭は、身近な実践と工夫を発表し、オンラインを含む約60人の参加者が交流した。2024年度に優れた新聞活用を行った市立札幌大通高など3校の表彰も行われた。

（3校の活動の概要3面）

講演で尾高さんは新聞博物館に来た子供から、新聞記者はインターネットのどこからネタを取って来るんですかと聞かれたというエピソードを紹介。取材や編集をして価値判断をしているのは報道機関で、記事をネットニュース企業に配信しているが、子供たちはまず「良質なコンテンツはどこから来るのか。情報の流通構造を学ぶことがメディアリテラシーとして重要」と指摘した。

さらに新聞社は現在、紙だけでなくデジタル版やデータベースも出しており、動画や音声もある。それらを含めて価値を伝えていくよう求めた。

また、5月に出た総務省の調査で偽・誤情報を見聞きして正しいと思った人は47・7％。見聞きした4人に1人はその情報を拡散したというデータを用いながら、交流サイト（SNS）などで「自分に近い情報が集まるフィルターバブルも日本では4割弱の人しか認識してない。フェイクニュース（偽情報）に弱い国」と述べた。

一方、ニュースはユーチューブで見れば十分という言葉に対しては「ジャーナリズムの側や先生方が『フィルターバブルやエコーチェンバー、アテンションエコノミーなどによって見ているものは偏っていく。それは構造的な問題ですよ』と話せるようになるといい」とした上で「だから新聞で学ぶことが大切と伝えていきたい。それが私の言うNIEの再定義。そうでないとNIEの目的である民主主義の担い手は育たないと思う」と危機感を募らせていた。

続いて川端教頭は「情報を収集・整理・発信するためのNIE」と題して新聞型の学級通信や新聞記事データベース（DB）を活用した社会科の調べ学習などを紹介。日常の実践を通じて「子供に新聞を当たり前の存在にすることが大切」と呼びかけた。

身近な実践として取り組んだスクラップノートは図書室前に置き、生徒に興味のある記事を貼ってもらって1年間に約100の記事が集まったという。また、学級通信を新聞形式で作ることは写真を効果的に使いやすく「見出しで内容が伝わる。忙しい保護者にも読んでもらいやすい」という利点があるとした。

欧州連合（EU）統合の是非と「なぜアフリカはラストフロンティアと呼ばれるか」をテーマに、社会科で記事DBを用いて行った調べ学習については「インターネット検索は調べるのに時間がかかるが、記事DBではネット検索ほど時間をかけず、時系列的に事実を追うことが可能になる」と優位性を指摘した。

ポスター発表に道内からも2校

全国大会神戸大会

第30回全国大会神戸大会（日本新聞協会主催）が7月31日、8月1日の両日、神戸市で開かれ、参加した約1800人が、正しい情報を見極めて活用するメディアリテラシーの重要性などについて考えた。

（関連記事2面）

初日のパネル討議「情報で、いのちを守る」＝写真＝で日本ファクトチェックセンターの古田大輔編集長は偽・誤情報の拡散に「旅行に行くときは旅先の情報をよく調べる。同様に知的な健康を維持するためには情報の吟味が重要」と指摘した。司会を務めたジャーナリストの池上彰さんは「どうやって正確な情報を得て解釈していくか今、転換期となっている」とした。

これに先立ち作家の小川洋子さんが「言葉は人をつなぐ」と題して記念講演した。新しい技術をどう使いこなすか難しい時代を迎え「相手への想像力を持って言葉を発することが重要」と語った。

2日目は計28の実践発表や公開授業が行われた。阪神淡路大震災から30年に当たり、兵庫県内の学校が新聞を活用した防災教育の実践などを紹介。ポスター発表には、空知管内栗山町立栗山小の冨樫忠浩教諭と胆振管内安平町立早来学園の片岡鉄也教諭のポスターも含め、全国71団体が防災などの取り組みを出展した。

防災が主要テーマに

公開授業で新聞読み比べ

全国大会神戸大会は、阪神淡路大震災から30年の節目を迎えて防災に取り組む多くの授業が公開された。

東日本大震災に関する記事を載せた子ども新聞を読み比べる授業を公開したのは姫路市立豊富小中の前野翔大教諭。6年生24人が岩手、茨城、静岡、福岡の4県で今春発行された紙面を読み、グループで話し合って発表した。

岩手日報の紙面で児童に「子どもの写真を載せている意図は」と尋ねると「これからも大きな災害が起こるかもしれないから」と回答。未経験の震災について、児童に知ってほしいという願いが子ども新聞の編集者にあることを学んだ。

西日本新聞「こどもタイムズ」の見出しは「今も2万8000人ひなん」。今もについて「見出しを付けた人は多い、少ないのどっちと思っているのかな」と問うと「多い」と複数の声が上がった。「まだたくさんいると伝えたいのが分かるよね」とまとめた。

さらに、避難時の様子を伝えた記事と、今年の宮城県南三陸町の旧防災庁舎保存を取り上げた記事を読み比べた。執筆した神戸新聞の記者が、両記事を書いた時の思いを述べた。前野教諭は「同じことを扱っても、地域や時間の経過で発信者の伝えたい思いや意図は異なる。私たちはそれを考えていく必要がある」と授業の狙いを語った。

兵庫県立須磨友が丘高の岩本和也教諭は、近くにある神戸市立横尾小との小高連携授業による防災教育の実践について紹介した。同県の「防災ジュニアリーダー」でもある高校生が、阪神淡路大震災や能登半島地震の避難所について書かれた新聞記事を小学生に読んでもらい、話し合う授業を行った。小学生からは「避難所の人々の暮らしが分かった」などの感想が寄せられ、同高2年の山口紗耶さんは「児童が『お母さんとも話してみる』と言ってくれ、授業をして良かった」と振り返っていた。

全国大会神戸大会から

今回の神戸大会は「時代を読み解き、いのちを守るNIE」というスローガンの下、佐渡裕氏が指揮する「スーパーキッズオーケストラ」の素晴らしい演奏で開幕しました。

続いて行われた討論会では個人発信もある程度有効であることや、過去の記録を読んで必要なファクトに気づくことの重要性などについて興味深く聞きましたが、「生きていた人の気持ち、記憶の伝承も大切」というメッセージが特に印象に残っています。

藻岩高・古畑理絵教諭

震災後30年 生命力実感

基調講演では芥川賞作家小川洋子さんが、誰もが発信できる時代において、さやかなことまで人に知ってもらえるようになったけれども、SNSでは言葉の向こうにいる人間の体温を感じ取れないこと、それに対して新聞には独特の時間の流れがあるのが魅力だと語っていました。

基調講演では芥川賞作家小川洋子さんが、誰もが発信できる時代において、さやかなことまで人に知ってもらえるようになったけはエコーチェンバーやフィルターバブルなどをキーワードに、池上彰氏の進行による活発な意見交流の場となりました。選挙戦での情報発信における新聞社の組織力を生かした丁寧な取材とファクトチェックについての解説からは、職業人としての矜持を感じました。

このほか「減災」に関しては、災害初期の空白期間得していく様子が見られました。

2025年に開校したばかりの北神戸総合高の授業では、生徒が自ら作成した「ツッコミ新聞」を手に、参観者の間を回って質問も受けるなど、積極的に交流していました。生徒から「どうしたらみんなに読んでもらえるか」という発言があり、授業の目標である「主体的に問いを立てる力の育成」に近づいていました。

大会全体を通して震災以降30年間努力してきた神戸という土地の生命力を感じました。生徒の一人が「一つの情報と自分の知識だけでは、正確なことが十分に伝わらない」という感想を述べていましたが、NIEの活動を通して、このような思いに一つ一つ応えていきたいと思います。

2日目は、西宮市立浜脇中と北神戸総合高の授業を拝見しました。「NIEノート」に継続して取り組んでいる浜脇中学校の授業では、米の価格や救急車出動など、多岐に渡る記事について生徒が感想を発表しており、「持続可能な社会」という同じテーマを追究していても、見えているものが異なることを繰り返し習

確かな情報源活用 2中学の授業説明

渡島地区セミナー

第20回渡島地区セミナー（北海道NIE推進協議会主催）が8月19日、北海道新聞函館支社を拠点にオンラインで開かれ＝写真＝、教員ら約20人が参加した。

セミナーでは北海道教育大函館校の野嵜雄太講師らが、函館市立南茅部中と新潟県上越市立中郷中の新聞製作を通じた交流授業について解説。両校の3年生は昨年度、フェイクニュースを盛り込んで地域の特色を紹介する新聞を製作。両校の生徒たちが、フェイクを見抜こうと相手校の新聞を熟読し意見交換した。

野嵜講師は「生徒の感覚や知識だけでフェイクニュースを見抜くことはできない」と説明。「情報社会では新聞などの確かな情報源を活用する必要があると知ってほしい」と述べた。

最賃引き上げ報道 3社の違いを学ぶ

札幌地区セミナー

第9回札幌地区セミナー（北海道NIE研究会など主催）が9月2日、札幌市北区のあいの里東中で開かれ、教員ら約30人が意見を交わした。

同中の本家陽菜教諭が1年国語の授業「情報収集の達人になろう」を公開＝写真＝。情報収集で意識すべきことや新聞記事の読み方を学んできた生徒たちは、最低賃金の引き上げを報道した新聞3紙を読み比べ、各新聞に掲載されたリードや見出し、強調したいことをまとめた。

生徒たちは北海道新聞が北海道内の最低賃金について取り上げ、朝日新聞は折れ線グラフで上昇の推移を伝えていること、読売新聞は海外の状況にも触れていることに着目して発表。伝えたいことに応じて見出しや資料を使い分けていると学んだ。

24年度優秀実践校の3校表彰 NIE推進協

優れた新聞活用が評価され、8月の北海道セミナーで2024年度の「実践表彰校」に選ばれた3校。道内の実践指定校32校の中から小中高1校ずつ選ばれた札幌市立明園小、芽室町立芽室西中と市立札幌大通高の活動内容の概要を紹介する。

札幌・明園小 檜克博教諭
「家事は仕事か」熱く論議

他の担任教諭も含めた三つの実践を報告する。

①立場や考えの違いを意識して話し合う

4年国語の「新聞を作ろう」では、4年生のことやクラスのことを3年生に伝えようと、グループで記事を分担しながら新聞を作った。記事の大きさをどうするかについて、自分の考えやその理由について意欲的に話し合う姿が見られた。

②自分と違う意見を生かし自分の考えをまとめる

5年家庭科「できるよ家庭の仕事」では「家事は仕事か」を議論。「家族の一員として家事は必要」といった理由で仕事だという意見、「給料がない」ことなどから違うという意見、そのほか「ボランティアのようなこと」などの意見が出た。意見が定まらないことも学びだと伝え、家族みんなが協力していくものということを一致点とした。

③学んだことを他の学習で生かす

5年書写「めざせ！新聞記者」＝写真＝では、記事を見て行頭や行末の高さがそろっていることや、平仮名は漢字より少し小さめに記載されていることに子どもたちは気付いた。その他にも「目立つように囲っている所がある」などの指摘もあり、ノートの書き方やポスターのまとめ方に生かしていくという声も多かった。

芽室西中 掛水成幸教諭
各種の「まとめ新聞」製作

本校では地域を学ぶ「かべ新聞」＝写真＝や「学級新聞」「学習新聞」など、各種の「まとめ新聞」作りに取り組んでいる。

2年生が総合の時間に作った「かべ新聞」は、宿泊学習で訪れた足寄町と芽室町を比べた記事を掲載し「全十勝小・中学校かべ新聞コンクール」で最高賞を受賞。3年生となる2025年度は修学旅行のまとめ新聞を作る。

タブレットを使った「学級新聞」にも新たに挑戦した。横組みの紙面にはクラス紹介や体育祭、宿泊学習の様子のほか一人一人の「個人目標」を載せ、読みやすくまとめた。

理科では、冬休みの課題として「理科偉人新聞づくり」に取り組んだ。例えばコペルニクスなら『地動説』を提唱した天文学の革新者」などの見出しをつけて編集した。このほか、全学年で手書きの社会科まとめ新聞を作った。

2年生の社会では冬休みに「新聞スクラップ」づくりに取り組んだ。教材の記事は十勝毎日新聞電子版から私が選び、生徒が使う授業支援アプリ「ロイロノート」にアップ。4人ひと組で、記事の内容をまとめる「要約係」、記事の関連地図やグラフを載せる「調査係」などを分担し、一つの作品を仕上げた。

札幌大通高 石山俊央教諭
記事貼り自分の考え発表

4年生では、各自が「面白い」「知ってほしい」と感じた記事を集めてB2大の方眼紙にレイアウトし、貼り付けてつくる「じぶん新聞」づくりを行った＝写真＝。生徒たちは記事を読み込んで3～5本を貼り付け、自分の考えや感想を加えてレイアウトする。特に読んでほしい箇所には下線を引いて強調した。

テーマは「少子化」「観光」「SNS」など、社会の今を反映したものが目立った。クラスごとに発表会を行い、年度末の学校行事では作品を教室に展示。社会と個人をつなぐ新聞の役割について認識を深めることができた。

「情報Ⅰ」の授業では授業始めの10分ほどを使い、情報社会や情報に関する新聞記事を読んで入力する取り組みを年間を通して続けた。

例えば「デジタルデバイド」など、授業で習った言葉が世の中でどう使われているか知ることで、情報への興味や関心が高まり、学習意欲の向上につながったと思う。

本校では新聞を図書室と進路相談スペースに置き、自由に閲覧できるようにしている。外国籍の生徒らが在籍する国際クラスや進路活動でも活用している。

また、廊下の掲示板には、その日読んでもらいたい記事を掲示している。

情報リテラシー 大切さ発信

読売新聞北海道支社編集部長 太田 雅之

リレーエッセー 多紙彩々

出前授業 今後も真摯に

当日の朝刊も使い、情報リテラシーについて解説した星槎国際高札幌北学習センターでの出前授業

学校現場で情報リテラシーへの関心が急速に高まっていると感じる。

今年に入り、札幌市内の中学校と高校から「情報を読み解く力、情報リテラシーについて生徒たちに話してほしい」との依頼を相次いで受けた。一つは星槎国際高札幌北学習センター（札幌市）の社会科教諭、田坂直之さん（49）からの要請だった。

田坂教諭によれば、最近、生徒たちに自分の意見を書かせる課題を出すと、「外国人排除」や「女性蔑視（べっし）」など驚くような意見を書く子が目立ち始めた。生徒に「どうしてそう思うのか」と尋ねると、「よく知らないけれど、みんな言っている」とのこと。「みんなとは誰？」と質問を重ねると、知り合いではなくSNSの投稿だという。「ネット空間の情報の渦に巻き込まれるうちに考えが偏ってしまっている」。そんな危機感があるという。

8月20日、同校を訪ね、新聞記事をスクラップしてニュースを読み解くゼミ授業を選択している生徒8人に出前授業を行った。ふだんニュースを見聞きするメディアを尋ねると、X（旧ツイッター）やヤフーニュースなどで、当然ながらデジタルネイティブの世代だ。

SNSでは、過激な内容で関心を引きつけて広告収入を得るアテンションエコノミーが横行していることを説明した。フィルターバブルやエコーチェンバーという特性によって自分好みの情報、似たような意見ばかりを見聞きして知らぬ間に考え方が偏ってしまう危険性も強調した。生徒全員がアテンションエコノミーという言葉を聞いたのは初めてといい、身を乗り出して聞いてくれる子もいた。

7月には、中学校の探究学習でメディアリテラシーを勉強しているという札幌市の生徒3人の訪問を受けた。SNSにあふれている情報の真偽を見極める方法として、スマートニュースメディア研究所のサイトを参考に、あるクイズを出した。

コロナ下の2020年に行われた小学校の運動会で、距離を保つため長さ2メートルのバトンを使ったリレーが行われたというXの投稿を示し、ホントかウソかを尋ねた。もの干しざお大の棒を抱えて走る児童の写真は一見ウソっぽいが、答えはホント。毎日新聞が発信した、れっきとしたニュース記事だ。

誰が発信しているかを確認することの大切さを伝えるクイズだが、生徒3人とも正解だった。その根拠を聞くと「投稿者が新聞社だから」。今の中学生たちが、新聞社のニュースを手がかりにしてくれていることを心強く思った。

デジタルネイティブだからこそ、ネットの危険性への対応力も高いように感じた。ある生徒からは後日、「アテンションエコノミーについて知り、改めて情報を正しく扱うことは大切だと実感できました」との手紙をいただいた。

新聞が社会から信頼を得られるよう、真摯に取り組んでいかなければと自戒を込めて思う。その上で今後も依頼があれば、微力ながら学校現場で情報リテラシーの大切さを伝えていきたい。

本年度セミナー 全道で6回計画

推進協総会で承認

写真＝同協議会には道内の新聞・通信社計13社と教育関係者が加盟しており、総会には報道、教育関係者ら21人が出席した。

北海道NIE推進協議会は5月15日、札幌市中央区の北海道新聞本社で2025年度定期総会を開いた＝写真＝。同協議会には道内の新聞・通信社計13社と教育関係者が加盟しており、総会には報道、教育関係者ら21人が出席した。

初めに24年度の活動報告が行われ、実践指定校32校の1年間の活動内容をまとめた報告書を発行したことや、NIEアドバイザー研修会、大学のNIEを考える会を開催したことなどを紹介した。

続いて25年度について、日本新聞協会認定の実践指定校32校に加えて、北海道NIE推進協議会が2校を独自認定校とすることを報告。8月8日開催の北海道セミナーで実践表彰校の表彰式を実施することや、札幌市や帯広市、新ひだか町など全道5カ所でも地区セミナーを開催するといった活動計画を提案し、承認を得た。アドバイザー研修会や大学のNIEを考える会も引き続き開催する予定だ。

日本新聞協会が認定するNIEアドバイザーは24年度からの変更はなく、引き続き全道の13人が務める。

編集後記

神戸市の甲南小4年生の公開授業「シンブリオバトル」を全国大会で見学した。面白いと思って選んだ記事について他の児童に説明し、質疑応答後に一番読みたくなった記事を投票で決めた。「ビブリオバトル」（書評合戦）の新聞版だ。

記事の内容を理解してまとめ、自分が伝えたいことを考えて整理することが目標の授業。小学生新聞などから取り上げた記事はソユーズ宇宙船、太陽系が生まれた頃の小惑星「リュウグウ」の岩石、トカラ列島で地震続発など様々だった。

朝の時間に当番の児童生徒がお薦め記事を紹介する取り組みもあるが、シンブリオバトルでは、勝敗のあるゲーム感で会場は拍手と歓声に包まれ、活況だった。道内の学校でも試してみる価値はあると思う。（福）